かけひのこと

土田龍太郎

文月に入りてはや十日あまり經ぬれど、まだ處暑にも至らねば、秋立ちぬとは名のみにて、せめて荻の上葉をそよとも風のおとなはばこそあらめ、さるけしきさらになし。なほつれなくもあかあかと照れる日影には、薄き衣だに所せく汗あゆるばかりなれば、うたていぶせきことこよなし。

かかるときはひたぶるにこもりゐて、なにくれのはかなごと、あるは長く忘れゐたりしいにし世のこと思ひつづくるに、なつかしきふしなきにしもあらねど、おほかたは恨み悔まるることの數そひがちなれば、ものぐるほしさいとどつのりきていかんともせむすべ知らにわびし。

さはれかくよろづ熱がはしきほどにも、さすがすがやかにおぼゆるをりさらになしとも云ひがたし。木の葉にうづもれぬる庭の奥より宿近くまでしつらへたるかけひを傳ひくる水のせせらぎにしづく、けはひばかりは涼しさもよほすつまとなりて、ことには竹の樋(ひ)のはぬる音のたえだえに聞ゆるからにふと目覺る心地するぞおもしろきことこよなき。

かけひを歌に詠むことさしもめづらしからず。とくよりわがなじみきたれるは

呉竹のかけひの水はかはるとも
すみあかざりし宮の内かな

てふ平經正の一首にぞある。壽永二年七月、平家一門西國下向のをり、この經正日ごろ睦びまゐらせし守覺法親王に御いとま申さむとて御室御所にまうでて、名器なる青山の琵琶を宮にあづけたてまつりしとき、つのる思ひにたへやらでとみにも御前をえまかでざりしこと、平家物語につばらに語りたれども、そのをりに經正のものせし右の一首をも載せたり。

そもかけひとは四時にわたるものにて、これを歌に詠まむにいづれを季とも定めがたし。さればここにかの夫木和歌抄を披き見るに、樋(ひ)を題とせる歌十三首ばかり列ねたるは、春夏秋冬いづれの部にてもあらず、雜部十五といへるところにぞある。

この十三首おほかたはかけひの歌なれども、とりあへずは三首のみここに引きみるべし。

順德院
里とほくはやまの道やなりぬらん
かけひの水の音ぞまれなる

民部卿爲家

かけわたす竹のわれひにもる水の
たえだえにだにとふ人ぞなき

清輔朝臣

はしり井のかけひの水のすずしさに
こえもやられずあふ坂の關

かけひを云ふ發句に俳諧のたぐひの少かるまじきは思ひはかるにたへたれども、いかなる人のいついかなる佳句を口ずさみけむはいまだ知られねば、向後かつがつ尋ねみるほかすべなかるべし。今はわがものせる拙吟一句ばかり人笑(わろ)へなるをもはばからで、左に記してやみなむかし。

涼しさをただ一すぢにかけひかな

（令和六年八月二十四日受附）